

## 五音

「五音」は、観世宗家に所蔵される写本が、昭和五年、故片山博通氏によって発見され、昭和七年に宗家から複製刊行されたものである。したがって『世阿弥十六部集』には入っていない。

内容としては「五音曲」とだいたい同じだが、五音曲そのものを説くことよりも、その実例を示すことを主とする。そのため、芸論としてはあまり高い価値をもつとはいえないけれど、挙げられている例曲が研究資料として重要である。すなわち、現行曲の詞章と世阿弥当時のテキストとの差異が本書の引用によってある程度までわかること、現行曲のあるものが既に存在する謡ものから詞章を借用しているなど制作プロセスがわかること等である。

しかし、さらに重要なのは、能の作者考定に基本資料として高度の信頼性をもつことだろう。特に、世阿弥作の能に関しては絶大な価値をもつ。この点について、曲名だけで作詞者・作曲者の名がない曲は世阿弥の作であるという解釈を出された能勢博士の卓見は、本書の資料価値を決定的なものとした。

観世宗家の所蔵本は上下二冊の別本であるが、ともに観世座七世の大夫宗節の筆と認められる。「祝言」「幽曲」「恋慕」「哀傷」の四種の音曲を収める上冊は、曲趣の説明の大半や、例曲の引用文の大半を省略した略本で、著しく簡略である。「闌曲」を集めた下冊は、上冊ほど省略がはげしくはないが、やはり略本である。最近、下冊の完本が世に出て、江島伊兵衛氏の鴻山文庫に収められた。

底本としては、鴻山文庫本が最適であろうけれども、まだ公刊されていないものであるし、芸論としての観点からは、略本であることはあまり支障が無いと思われるので、観世本を底本とした。

五音上

当道音曲のこと、和州・江州、または田楽節、この不可出。まづ、和州において申楽の芸人多しと云へども、亡父観世節を以て、当流庭訓とせり。江州は、犬王が曲なり。田楽節は、亀阿弥、これまた一流なり。この達人どもは、昔の道になりて、今は古体の音声、伝へて世に残れり。その後、堪能その者絶えて、師家無くなりしより、江州にも田楽にも、能を作書する者絶えて、形のごとく当流に亡父の一流を相具して、この道を記して、もつて三道(種・作・書)を伝へ、芸能を習道して、当道を守るゆゑに、斯曲おのづから広まりて、応永年来よりこのかた、当世の幽曲となれり。しかりと云へども、音曲を万人翫ぶかりにて、曲舞・只謡の音声の性位の分け目をも知る人なく、まして、祝言・望憶の声懸りの変わり目も分明ならねば、しばらく曲道を五箇条に分ちて、祝言・幽曲・恋慕・閑曲と定めて、五音と名付く。これは、音曲習道の目安として、五音の曲味をよくよく拈弄して、習道あるべきものなり。しかれば、近年

あまねく耳慣れし謡・曲舞の数々、また先達の古曲少々、大概記すところなり。よくよく見分けて、稽古あるべし。

- 1 この 底本は以下およそ三字分ほど欠く。能勢博士は「間をば」かと推測された。
  - 2 犬王 近江申楽の日吉座に属した名人。のち、將軍義満から道阿という号を与えられた。応永二十年(一四一三)没。
  - 3 亀阿弥 田楽新座の亀夜叉の号。「亀阿、音曲の先祖なり」(申楽談儀)。
  - 4 その者 名人。一四三頁注2参照。
  - 5 形のごとく いちおう。
  - 6 幽曲 底本「遊曲」。「遊び」は宛て字。応永年間このかた、観世ふうの幽玄な曲が勢を得たのであろう。
  - 7 曲舞 曲舞系統の節。いまのクセに見られる。「曲付次第」(二四九頁)参照。
  - 8 只謡 小歌系統の節。いまの上歌などが典型的。
  - 9 恋慕 この下に「哀傷」を脱したのであろう。
- 一、祝言 安全音と名付く。安く全き内、応曲あり。  
伏見 亡父曲付。
- 指声 それ久方の神代より、天地開けし国の初め。

足引山

指声 足引の山下水も絶えず、浜の真砂の数積りぬれば、今は飛鳥川瀬になる恨みも聞えず、小石の嶮となる悦びのみぞあるべき。しかれば天に浮かめる浪の一滴の露より起り、山河草木恵みに富みて、国土安全の当代なり。千代木の風も静かにて、朝暮の雲も収まれり。いざここに、わが代は経なん菅原や、わが代は経なん菅原や、伏見の里は久方の、天照す日も影広き、瑞穂の国は豊かにて、民の心も勇みある、御代の治めは有難や、御代の治めは有難や。

松が崎 十郎元雅曲。

寂寞たる深谷 これを略す。

淡路 亡父曲。

それ天地開闢の初めと云つば これを略す。

富士山

そもそもこの富士山と申すは これを略す。

吉野山 元雅曲。

指 古への賢き人の遊びけん 略。

敷島

それ敷島の国つ業は 略。

須磨 付源氏。

指 これは津の国須磨の浦に 略。

静 亡父曲。

次第 花の跡訪ふ松風は、花の跡訪ふ松風は、雪にや静かなるらん 略。

桜川

これに出でたる物狂ひの

通小町

指 忝けなき御覽へなれども、悉達太子は

井筒

さなきだに

松風 亡父曲。

心尽しの秋風に

融

陸奥はいづくはあれど塩竈の

葵上

一声 三つの車に法の道

箱崎

一声 箱崎の松の葉守りの神風に

汐波 亀阿曲。

指 それ汐を弄する身にあらずは

盛久 元雅曲。

指南無や大慈大悲の  
蘇武

それ遠く異朝を引いて見るに、漢の帝の御時

宇治山 金剛曲。

浄藏法師 父王の盛徳

布留

初み雪布留の高橋見渡せば 亡父作書。

恋重荷

それ及び難きは高き山

班女

げにや祈りつつ

六月祓

げにや数ならぬ

花形見

われ応神天皇の

松風 後の段。

げにや思ひ内であれば

難波

或るは男山の

錦木

陸奥の信夫

王昭君 金春曲。  
これは唐合甫の里に

盲打 亡父曲。

クドキ 梓の弓の

松浦 福来曲。

生国は筑紫肥前

哀傷

一生は風の前の雲

江口遊女 亡父曲。

それ十二因縁の

弱法師 元雅曲。

それ鴛鴦の衾の下には

女郎花 亀阿曲。

をみなへしは女郎花と書きたれば

当麻

有難や

隅田川 元雅曲。

人の親の心は

春永

それ生死に

求塚 亡父曲。

されば人、一日一夜を経るとだに

舟橋

往時渺茫として

禿高野 亀阿曲。

花は散つて根にあれど

橋立

それ親の子を思ふこと

鶴

指悲しきかなや

鵜飼

指げにや世の中の

千寿

さても本三位の中將

忠度

恥かしや亡き跡に

高野 亡父曲。

聞きしに越えて

1 応曲 意味不明。「世阿弥二十三部集」は「恋曲」と

翻字するが、それでは祝言曲の本旨に合わない。「五音曲」に「このやすく云ひ流したる懸りを、大事に思ふ宛

てがひ、また大事なり」(三三〇頁)とあるので、「懸曲」の誤写かもしれない。

2 千代木の 以下「収まれり」まで下歌かと思われる。また「いざここに」から「有難や」までは、拍子当たりでいえばトリで始まる上歌。したがって、指声(サシ)は「当代なり」まで。

3 吉野山 以下は幽曲の例と考えられる。

4 父王の盛徳 底本「フワウノセイトク」。浄藏は、平安時代の高僧として有名な浄藏大徳とも考えられるが、宇治山には縁がないようである。これは「法華経」妙莊嚴王品の、浄藏と浄眼が父の妙莊嚴王を仏道に誘い入れたことをさすのであろう。そうすれば、「フワウ」は「父王」と考えられる。

5 恋重荷 以下は恋慕の例と推定される。

6 一生は風の前の雲 何の曲か不明。「鍾馗」にこの句が見えるけれども、世阿弥作とは認めがたい曲であるから、別の曲(おそらく曲舞の謡)にあった句を「鍾馗」が引いたのであろう。「五音曲」(三三七頁)参照。

### 五音下

一、関曲 これは各別の曲聞なり。(論語に云はく、「中庸之

指南無や大慈大悲の  
蘇武

それ遠く異朝を引いて見るに、漢の帝の御時

宇治山 金剛曲。

浄藏法師 父王の盛徳

布留

初み雪布留の高橋見渡せば 亡父作書。

恋重荷

それ及び難きは高き山

班女

げにや祈りつつ

六月祓

げにや数ならぬ

花形見

われ応神天皇の

松風 後の段。

げにや思ひ内にあれば

難波

或るは男山の

錦木

陸奥の信夫

王昭君 金春曲。

これは唐合甫の里に

盲打 亡父曲。

クドキ 梓の弓の

松浦 福来曲。

生国は筑紫肥前

哀傷

一生は風の前の雲

江口遊女 亡父曲。

それ十二因縁の

弱法師 元雅曲。

それ鴛鴦の衾の下には

女郎花 亀阿曲。

をみなへしは女郎花と書きたれば

当麻

有難や

隅田川 元雅曲。

人の親の心は

春永

それ生死に

求塚 亡父曲。

されば人、一日一夜を経るとだに

舟橋

往時渺茫として

禿高野 亀阿曲。

花は散つて根にあれど

橋立

それ親の子を思ふこと

鶴

指悲しきかなや

鶺鴒

指げにや世の中の

千寿

さても本三位の中將

忠度

恥かしや亡き跡に

高野 亡父曲。

聞きしに越えて

1 応曲 意味不明。「世阿弥二十三部集」は「恋曲」と

翻字するが、それでは祝言曲の本旨に合わない。「五音

曲」に「このやすく云ひ流したる懸りを、大事に思ふ宛

てがひ、また大事なり」(三三〇頁)とあるので、「懸

曲」の誤写かもしれない。

2 千代木の 以下「収まれり」まで下歌かと思われる。

また「いざここに」から「有難や」までは、拍子当たり

でいえばトリで始まる上歌。したがって、指声(サシ)

は「当代なり」まで。

3 吉野山 以下は幽曲の例と考えられる。

4 父王の盛徳 底本「フワウノセイトク」。浄藏は、平

安時代の高僧として有名な浄藏大徳とも考えられるが、

宇治山には縁がないようである。これは「法華経」妙莊

嚴王品の、浄藏と浄眼が父の妙莊嚴王を仏道に誘い入れ

たことをさすのであろう。そうすれば、「フワウ」は

「父王」と考えられる。

5 恋重荷 以下は恋慕の例と推定される。

6 一生は風の前の雲 何の曲か不明。「鍾馗」にこの句

が見えるけれども、世阿弥作とは認めがたい曲であるか

ら、別の曲(おそらく曲舞の謡)にあった句を「鍾馗」

が引いたのであろう。「五音曲」(三三七頁)参照。

### 五音下

一、関曲 これは各別の曲聞なり。(論語に云はく、「中庸之

為徳也、其至矣乎」已上して、何とも謡ふ性位なり。おほかたは節付けのままにて、俱行もあるべし。真実は独り音曲なり。そのゆゑは、当座の気転によりて、何とも謡ふ位なり。祝・幽・恋・哀の、四音に離れて、また四音に渉る曲道あり。口伝あり。(深秘)。これ、すでに師家の位なるべし。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に嶋隠れ行く舟をしぞ思

ふ 關曲の姿か。

自然居士 亡父曲。

指声へそれ一代の教法は、五時八教をけつり(つくり)とあり、不審 教内・教外を分かれたり。〔只声なり、この声の位、無上の大事あり〕。五時と云つば、華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃、四教とは、これ蔵・通・別・円たり。釈迦教主の秘蔵を受け、五(主)相成身のみね(む)とありを開きし(下)よりこのかた、誰か佛法を崇敬せざらん只詞へわれはもと隠遁国の民なり。この内に法界舎と云ふ家あり。禁戒を垣として悪しき友をば近付けず。さればかく身を捨て果てば、静かなるを友とし貧を棄とすべき、隠遁の栖・禪觀の窓こそ望む所なれども(下)、ただし山に入りても、なほ心の水の、水上は求め難う、市に交はりても、同じ流れの水ならば、真如の月などか澄まざら

あけては、きちべうにはれて(主)ういのかんかんたるを砕きて、うんでんはんをさまる。尉にこれを怪しめて、この物語の不審を少々尋ぬれば、この翁、齒もなき口を広らかにうち笑みて、上へいさ(延)とよ、対面の初めに、伊勢(しほる)物語の奥儀(不審)とありをくれぐれと語らんは、且(しほる)は空恐ろしや。且は道の聊爾なりとて、左右なく言はざりけりとや。いざや伊勢の神垣、越えけん跡を尋ねん。

秘する所の言の葉は、秘する所の言の葉は、数々なりと申すとも、殊に憚り多きは、馴れにし人の名字なり。へそも名字のしみとは、何事を申したりけるぞ。へ数々ありしその中に、とり分き十二人なり。へ十二人も三人もわれはまつたく知らぬなり、第一番は誰やらん。へ徒なりと名にこそ立てれ桜花、へ年に(延)稀なる人も待ちけり。へこの歌の主をば、人待つ女と書きたりしを、へ紀有(延)常が娘(名論義)と頭はすは、尉が僻事。へさてその後逢坂の、関の関屋の楨柱、へ立つ名も口惜し、思ひ朽ちなると、恋死にに死せしをば、へ物病みの女(しほる)と書きたりしを、へ大納言、長谷雄の卿の娘と頭はす。尉が僻事か。同へげにや住吉の、松の老木の朽ちがましや、物云ひしける翁なり、なほ(しほる)も長居せん、筋

ん。只詞へかやうに思ひしより自然心得、今は山深き栖を出で、かかろ物狂ひとなり。歌へ花洛の塵に交はり、花洛の塵に交はり、脚下(しほる)の波に裳裾を濡らし、万民(よする)に面を曝すも恨みならず。法(懸切)のためなれば身を捨つる、吹く風の、寒き山とて入る月に、指を指しても(よする)留め難きは、つながぬ月日なりけりや。

つながぬ月日なりけりや。

葛袴 亡父曲作書、但眼。

指声へ神勅に従ひて知願集を開けば、何々かの内大臣経信の卿、過ぎにし九月十三日に、住吉に詣で候。(下)伊勢物語の不審を教へて賜べと志ざし給ひしに、今日は名に負ふ秋の二夜なれば、海の面漫々と明らかにして、松の風磯辺の波を語らふなれば、心空に慄れて、下歌へ四所明神を巡礼し、釣殿に出で、月を眺むる所に、ここに怪しがる老翁、忽然と出で来たり。その姿を見るに、霜雪(よする)頭に重なる(つ)て、鬚髪に黒き筋なし。波浪額に置んで、面貌しきりに皺めり。くわうきやうとまかぶらたかに、しゆるにしてみにくく、白き水干の、古く赤みはてたるに、葛の袴(名風の見聞在之世)のここかしこ破れ損じたりけるに、錆色の立烏帽子を耳の際に引き入れ、嘯き月に向へば、せいしつのゆうゆうたるを

なきことや夕暮の、月もろともに住吉の、松の葉杖に縫りて、津守の浦に帰りけり、津守の浦に帰りけり。

- 1 已上して 達人の域までのほつてから。
- 2 独り音曲なり 『五音曲』(三三八頁) 参照。
- 3 主 おそらくは「豎」の宛て字で、豎の声「風曲集」二五八頁参照 になうたう意であらう。
- 4 但眼 能勢博士は「最も肝要な眼曲」と解されたが、「眼目の部分だけを作曲・作詞した」の意であらう。
- 5 知願集 『伊勢物語』の古注。
- 6 重なる(つ)て 底本「カサナテ」。三八一頁注16参照。
- 7 くわうきやうと 以下意味不明の語が多い。
- 8 せいしつの 以下意味不明。
- 9 尉に 底本「セウニ」
- 10 しみ 意味不明。

### 野守

指声へこれに出でたる老人は、この春日野に年を経て

弱法師 節曲舞。

上序へそれ(主)仏(しほる)日西天の雲に隠れ、慈尊の出世まだ(しほる)遙か、三会の暁いまだなり。指声へしかるにこの中間において、何と心を伸ばへまし。ここによつ

て上宮太子、国家を新ため、万民教へて、仏法流布の世となして、あまねき恵みを弘め給ふ。すなはち当寺を御建立あつて、初めて僧尼の姿を顕はし、四天王寺と名付け給ふ。曲舞へ金堂の御本尊は

歌占 元雅曲。

指声へこれは伊勢の国二見の浦の巫にて候。それ歌は天地開け初まりしより

蟻通

指声へ瀟湘の夜の雨頻りに降つて、遠寺の鐘の声(横声の懸り)も聞えず

実盛

指声へ笙歌遙かに聞ゆ

高野節曲舞 元雅曲。

上序へそもそもこの高(しほる)野山と申すは、平城を去つて二百里、郷里を離れて無人声、指声へしかれば末世の隠所として、結界清浄の道場たり

当麻

上序へそもそもこの当麻の曼荼羅と申すは

熱田 亀阿曲。

上序へそもそも当社と申すは、景行第三の皇子、御名は倭建命、地神五代には

竹取歌 同曲者。

次第へあるに甲斐なき世中を、あるに甲斐なき世中を、古畑打つぞ悲しき

西行歌

指声へそれ春の花は上求本来の梢に顕はれ、秋の月は下化冥闇の水に宿れり。(下)たれか知る行く水に三伏の夏もなく、潤底の松の風、一声の秋を催ほすこと、草木国土おのづから、見仏聞法の結縁たり。下歌へ教へ置くその品々の法の門、上歌へ開くる道は一つぞと、開くる道は一つぞと、知るや心の水清き、御法の舟なれば、行くこと易き彼の岸に、到り到りて聞からぬ、二世安樂は有難や、二世安樂は有難や。

伏見

上序へそもそも伏見の翁のこと

- 1 上序 いまクリという部分に当たたる。
- 2 万民教へて 底本「バンミンヲシエテ」。現行曲では「万民」の下に各助詞の「を」がある。脱字か。
- 3 歌 前に挙げてきたのが節曲舞であるのに対し、小歌節系統の謡であることを示す。
- 4 古畑打つぞ 底本「フルハタウツス」。「ス」の右に「ソ敷」と注する。

の御殿にて、御産(しほる)平安、皇子御誕生なる、厩戸の皇子と申すも、上宮太子の御事。

飛火

只詞へそもそも当社と申すは、忝なくも神護景雲二年に、河内国枚岡より、この春日山本宮の峯に遷らせ給ふ。

雪山

本には指声論義あり、略す。近年は、「有難やこの君の、豊の明り」と謡ふなり、わたくしにこれを記す。  
上歌へ曇りなやこの御代の、曇りなやこの御代の、豊の明りの始めより、千代木の風も収まり、雪しほる豊年に深かりき。面白(下)の雪山や、春毎に君を祝ひて若菜摘む、わが衣手に降る雪は、払はじ払はで、そのままに受くる袖の雪、運び重ね雪山を、千代に降れと作らん、雪山を千代と作らん。

李夫人 亡父曲。

指声へ忝なき御簪へなれども、いかなれば漢王は

およそ五音曲道の条々、以上。この外の音曲、於(古)体・当世、その数々、皆書不(及)ししかれども、他はこれに順ひて、よくよく知分可有(有)なり。

太子曲舞 亡父曲。これは昔太子伝の節曲舞の内なり。

作者不知人。

若君永享六年二月九日御誕生の時より、謡ひ替へたる言葉所々あり。

指声へわが朝にその威光を弘め、漢家にその名を顕はし給(下)ひしは、上宮太子にておはします。かの欽明天皇三十二、正月一日の夜半に御夢想の告げあり。(下)金色の僧来り給ひて、后に告げて宣はく、われに救世の願ひあり。すなはち後の御胎内に、宿るべしとありしかば、曲舞へ后答へて宣はく、妾が胎内は垢穢なり。いかで貴き御体を、宿し給はんとありしかば、童男重ねて宣はく、われは垢穢を厭はず、ただ(圭)望むらくは、人間に着到せんがためなり。后辞するに所なし。ともかくもとありしかば、この僧大きに悦んで、後の御口に、飛び入り給ふと御覽じて(后)の玉殿に入御なると御覽じて、暁月軒に傾ぶき(輝き)、松風夢を破り(納め)て、五更の天も明けにけり。帝この由聞こし召し、悦びの色をなし給ふ。后必らずしやうらんを、受け給ふべしとありしかば、(上)隙行く駒を繋がねば、大(しほる)跋提河の池の水、澄ま(しほる)で濁れる心地して、十二月と申すには(同声)、南殿

- 1 入御 底本「充御」。「御口に飛び入り」が不吉な連想をもつので、諷いかえた文句。「傾き」を「輝き」、「破り」を「納め」と改めたのも同じ理由である。
- 2 曉月 いまの闌曲では「キヨオゲ(ツ)」と発音する。(ツ)は親世流で「倉」と表記する特殊な発音。
- 3 十二月 底本「十二月」。現行闌曲では「十二箇月」となっている。おそらく「月」は「つき」とよんだのであろう。
- 4 於「古体・当世」 古いスタイルのも現代ふうのもの。

一、音曲習道の次第々々。文字読みより節をよくよく究め尽して、さて曲を磨きて、さて謡の詰め開きを心得て、音声の性位ごとく成就して、さて謡ふ当座の音聞、清曲なることを一可知。音聞清まらずは、成就不可レ有。この条々をことごとく曲得して、安全音になる位を、声懸りと云ふなり、およそ習道のほどは、節を体にして、習道終りてのちは、かかりを体にすべし。

一、昔、白鬚の曲舞を、亡父申樂に舞ひ出だしたりしより、当道の音曲ともなれり。しかれば、白鬚・由良湊・地獄、これは申樂の内ながら、押し出だしたる道の曲舞のごとくなるなり。また、海道下り・西国下り、玉林の作書として、南阿・親世亡父、曲付けせられしなり。

応安の頃より至徳年内の曲舞、以上。白鬚・由良湊・地獄、これは申樂の内なり。海道下り・西国下りは、ただ琳阿作書として、南阿・親世の曲付けなり。しかれども、曲舞の当道へは不出。これも遊樂の曲風のごとし。この外、近年、善光寺・百万の節曲舞、これらは当世の曲舞には云へども、曲舞の性位の本曲をば正に(ただし)して、声懸りを和らぐるばかりなり。わたくしの作書なり。

六代の歌 これは、ある御方より、「本説あることを、序・破・急に書きて進上せよ」との御意を以て、記したる歌なり。

へそれ世間の無常は旅泊の夕に頭はれ、有為の転変は草露の風に滅するがごとし。

- 1 音曲習道の次第 『音曲声出口伝』(二二九頁) および『花鏡』(二二八頁) 参照。
- 2 声 底本「セウ」とも読めるが、能勢博士が「カ、リ(懸り)」とされたのに従う。
- 3 白鬚の曲舞 能「白鬚」のクセになっている。
- 4 由良湊 親阿弥の作詞・作曲。『申樂談儀』に「名譽の曲舞」とする。

この曲舞どもも、道の曲舞よりは、和らぎたる曲分なり。道の曲舞と申すは、上道・下道・西岳・天竺・賀歌女なり。(乙鶴、この流を亡父は習道ありしなり)。賀歌は南都に百万と云ふ女節曲舞の末と云ふ。今は皆々曲舞の舞手へ入体絶えて、女曲舞の賀歌が末流ならでは不レ残。祇園の会の車の上の曲舞、この家なり。

白鬚曲舞 亡父曲付。闌曲なり。亡父作書。上へそれこの国の起り、家々に伝ふる所 同曲付。幽曲。およそ節曲舞の幽曲の由良湊節曲舞

懸り、これ初めなり、亡父作書。上へおよそ(しほる)人間の八苦の中に愛別離苦 地獄節曲舞 南阿曲付。これは哀傷の声懸りなり。作書山本。百万能の内。

上へ昨日も徒に過ぎ、今日も空しく暮れなんとす。海道下り 南阿曲付。この曲舞の幽は(不垂)闌曲。こ

れまた毎々幽曲にも亘る。作書玉林。西国下り 亡父曲付。玉林(林魁)作書。

指声へ寿永二年の秋の頃、平家西海に赴き給ふ。城南の離宮に到り

- 5 地獄 山本某作詞・南阿弥作曲。能「歌占」のクセに採りこまれていた。
- 6 押し出だしたる ちゃんとした。
- 7 道の曲舞 本来の曲舞。
- 8 玉林 琳阿弥の別称。他にもリン阿弥という者がいたので、区別するための呼びかた。琳阿弥が東国へ流されたとき「海道下り」を作詞し、南阿弥が作曲した。少年時代の世阿弥が將軍義満の前でこれを謡い、琳阿弥は罪を許されたという(『申樂談儀』)。「西国下り」も琳阿弥の作詞で親阿弥の作曲。
- 9 南阿 海老名南阿弥。通世者で、歌・連歌・音曲などに通じ、義満にも親近していたらしい。永徳元年(一三八一)三月没。
- 10 上道 以下「賀歌」まで、曲舞の流派名、または芸人たちの名。
- 11 百万 この女性をモデルとして能「百万」が作られたのであろう。
- 12 祇園の会の車の上の曲舞 曲舞車というダシが出たのである。能「舞車」参照。
- 13 幽は者は 意味不明。そのため書写者が「不番」と注したのである。誤写であらう。
- 14 玉林 書写者の注のごとく「林」の誤写。琳阿弥のこと。

- 15 曲舞の当道へは不出 本来の曲舞芸としては、うた  
 われるに至らなかった。
- 16 善光寺 能「相崎」のクセが善光寺如来の功徳をたた  
 えた内容。昔は「土車」のクセだった由が『甲斐談儀』  
 に見える。それが「善光寺の曲舞」であらう。
- 17 正にして 基本にして。
- 18 和らぐるばかり 小歌ふうのメロディに編曲したのみ。

## 夢跡一紙

晩年にいたり逆境に在った世阿弥は、七十歳のとき、長男の元雅に先立たれた。元雅は、本書のなかに「子ながらも頼なき達人」「祖父にも越えたる堪能」と言われているほどで、世阿弥が信頼しきっていた後継者である。能の作者としても、また「隅田川」「歌占」「弱法師」「盛久」などの名作を残している。将軍義教が音阿弥の芸を愛顧し、世阿弥たちの座は勢いを失ってゆくなかで、元雅さえ健在ならば、いつかは再び形勢を盛り返す希望も無いではなかったらう。ところが、その元雅が旅さきで急死したのだから、世阿弥の悲歎は絶望的なものであった。その心境を記した追悼文が本書である。

したがって、芸論としてはほとんど見るべき点が無いので、付載の形を取った。もつとも、元雅の死が永享四年（一四三二）八月一日であること、秘伝をすべて元雅に授けてあったことなどがわかるので、資料としては価値が無いわけではない。

吉野の奥にある天川神社には、永享二年十一月、元雅が能「唐船」を奉納したとき使った面（阿古父尉）が蔵されており、その面の裏に元雅の自筆で銘が墨書されている（八頁参照）。おそらく自座の衰運を挽回しようという願いではなかったか。しかし、その悲願もむなしく、一年八箇月後、元雅は客死した。わたくしは、昭和三十年に天川神社を訪れ、この面を手にして、感慨無量なものがあつた。

テキストは、松廼舎文庫本のほかに無い。